
雨夜の月

雪野椿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨夜の月

【著者名】

Z7639F

【作者名】

雪野椿

【あらすじ】

雨夜の月とは、みえないもののこと。彼岸と此岸のはざまで。その女はいつも雨になるとやつてくる。

彼女はいつも、雨の夜になると、僕の住処にやって来た。ずぶ濡れの姿で現れて、ご飯を炊いて、料理をする。

何故ずぶ濡れなの、傘をささないの、と問うと、彼女は、傘をさしても意味がないもの、と答えた。

夜の雨がいいの。水はつながりやすいから。

彼女と話していると、ただいま、と言いながら男が入って來た。タオルで頭を拭きながら、食べ物の匂いに誘われるよう、まっすぐ台所を覗く。湯気の立つた鍋を見つけて首を傾けた。あれ、また母さんが来てたのかなと、不思議そうに呟いている。

前に一度、彼の母親がやつてきて、彼が留守の間に食事を作つて帰つたことがあつた。その時は置手紙がしてあつたが、時々無言で用意されている食事も、ずっとそعدだと思つてゐるようだつた。電話で礼を言うのサボつてゐから怒られるかな、と言しながらこちらに歩いてきた。おせつかいだよな、とつぶやいてゐる。僕を見つけると、何を見るんだ、と彼は僕の前に屈んだ。大きな手で僕の頭をなでて、いい子にしていたか、と笑う。さあ、おまえの分だ。彼は僕の皿に、僕のご飯を盛りつける。

鬱陶しい雨だな。

窓の外を見てつぶやいた。彼の目線の先には彼女が立つていて、その向こうに窓がある。外ではまだ雨が降つてゐる。

こんな雨の日は、あの女を思い出すな。

彼は独り言のようく呟いてゐる。覚えてるか、雨みたいに湿っぽい女だったよな。ちょっと遊んで捨てたら、勝手に悲劇ぶつて海に飛び込んだ女だよ。

覚えているよ、だつて、そこにいるじゃない。ずぶ濡れの姿で。

僕が応えても、彼は何も言わなかつた。彼の目は外の雨を見ている。彼女を通り越して外を見ている。

そして彼は、用意されていた食事を、何の疑問も抱かずに食べ始める。母親の味付けとは違うご飯を、おいしいと言いながら彼は食べている。それを一口食べるごとに、少しずつ彼の存在が薄くなっている気がする。そうやって雨のたびに少しずつ痩せて行く。

彼女は窓の前に立つたまま、床に水溜まりを作つて、じつと彼を見ている。

ねえ、雨のようだつて。だから雨の日にばかり来るの。僕が彼女に言うと、そうね、と彼女は笑つた。

太陽は嫌いなの、昼は私の時間じゃないから。月は闇に隠れたものを暴きだすのよ。でも、雨の日は遠い雲の向こうだし、水は世界をつなぐから、雨の日はとても居心地がいい。そして私は、水と交わりやすいの。だって、水の中で死んだのだもの。

でも、どうして、僕にはあなたが見えるの。彼には見えないようだつたのに。

さあ。きっとあなたは人ではないものだからではないかしら。彼女は青褪めた唇で微笑んだ。

昔から、猫は靈を見るつて言つじやない。

終わり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7639f/>

雨夜の月

2010年12月25日12時26分発行